

追 悼



ありし日の荻島秀男氏

荻島秀男氏御略歴

満州北支で育ち、戦後アメリカへ留学。高校・大学・大学院を卒業、一時帰国、久留米大学医学部(1960年卒)、米国のケースウェスタンリザーブ大学医学部大学院卒業(ハーバード大学の西分校)、同校で臨床と教育を担当。米国大統領 National Honor Society 賞受賞。

帰国後、東京都主幹参事として東京都養育院リハビリテーション部長、老人総合研究所リハビリテーション医学部長を兼務、身障老人医療行政に関与、厚生省、労働省、通産省等各種委員会の委員として、リハビリテーションの啓蒙およびリハビリテーション専門医、理学療法士、作業療法士の養成充実、理学療法従事者、柔道整復師等のレベルアップに尽力した。同時に発展途上国のリハビリテーション指導、国際学会の同時通訳等でも世界的な評価を得ている。特にエジプトやイラク等をリハビリテーション指導のため国賓として訪れた。医学博士。

著書・訳書は1999年で130冊に達している。日本人初の世界的な資格を取得したりハビリテーション専門医として米国専門医科学術アカデミーの正会員、英国ケンブリッジCMMAの正会員として活躍した。2000年11月没。

〔「腰痛症 原著5版」(2000年12月20日発行、医歯薬出版刊)奥付より引用〕

荻島秀男先生の訃報に接して

大橋 正 洋 (神奈川リハビリテーション病院)

雑誌「総合リハビリテーション」が創刊されたのは1973年である。創刊から6年間、本誌の編集委員を務められた荻島秀男先生が、2000年の11月7日に逝去された。突然の訃報には、リハビリテーション医学界の人々が信じられないという思いで接した。筆者は、現在の本誌の一編集委員として、そして荻島先生にリハビリテーション医学への道を開いていただいた一後輩として、先生の業績と人柄を偲んでみたい。

荻島先生が、編集や企画に携わられていた約1/4世紀前の本誌を開くと、リハビリテーション医学の啓発と普及のために、荻島先生はしばしば筆を取っておられる。

創刊された年の特集「世界のリハビリテーションこの10年」では、1960年代から10年間に、世界では医学教育の中でリハビリテーションを取り上げる時間数が増加していることを指摘し、それに比較してわが国の医学教育の反応が遅く、日本が取り残されることになるのを憂慮されている。1975年には、リハビリテーション指導のため国賓としてエジプトに招かれた体験を報告されている。その中では、サダト大統領の指導と欧米各国の援助の下、総合リハビリテーションセンター建設が進められていて、諮問委員の意見がただちに施策へと活かされる有様をうらやましいと述べておられる。1976年の特集「海外におけるリハビリテーション医学の卒後研修」では、欧州や米国の状況より遅れているが、わが国は特定の障害に重点をおくよりも、all roundで質の高いリハビリテーション医が誕生するような卒後研修を行うべきとされている。1980年の巻頭言「リハビリテーション従事者の傲り」では、リハビリテーション医療が普及してきた状況を認められたうえで、リハビリテーション医療従事者に傲慢さが生まれはじめ、自分たちの都合を優先させたサービスが行われている有様を憂慮されている。

荻島先生の国際的センスが抜群であった背景には、満州で育ち、戦後米国へ留学して高校、大学、大学院を卒業。一時帰国して久留米大学医学部を卒業されたあと、再び米国へ行きケースウェスタンリザーブ大学でリハビリテーション医学を専攻され、日本人として第一号の米国リハビリテーション専門医の資格を取られた経歴がある。帰国後、当時の東京都養育院付属病院と老人総合研究所でリハビリテーション部長を務められ、同時にわが国のリハビリテーション行政にも各種委員会委員として深くかかわられた。

先生は、ご自分が教育を受けた米国と比較して、わが国のリハビリテーション医学が著しく立ち後れていると感じられ、これを米国並みにすることに責任を感じておられたのだと思う。

荻島先生は、1999年までにリハビリテーション関連の著書・訳書を130冊以上刊行されている。この中では、Rene Cailliet博士の痛みシリーズの翻訳が有名である。先生は包括的医療としてのリハビリテーションだけでなく、physical medicineとしてのリハビリテーション医療にも注目され、その普及に努められた。

筆者は医学部卒業まもなく、先生の初期の著書である「米国の医学教育と医療事情」(医学書院)を手にする機会があった。その本の著者経歴に、米国リハビリテーション専門医という記述をみつけた。リハビリテーションとは何だろうとの素朴な疑問から、養育院病院を見学するつもりで荻島先生に電話をし、その結果、養育院へ就職してリハビリテーション医学の道をすすむことになった。

先生と接して、当然ながら英語を操る能力のすごさに驚かされた。Cailliet博士が来日されたときの講演会の完璧な同時通訳や機関銃のようなスピードでタイプを打ち即座に英文の手紙を書き上げられる様子は忘れられない。また、ピアノ演奏にもプロ並みの技量をもっておいでで、リハビリテーション関係の研究会でお手並みを披露してくださったことがある。私はその後、先生のお力で米国ワシントン州立大学へ留学することになった。

先生がわが国のリハビリテーション医学界に果たされたもう一つの功績は、多くの医師、理学療法士、作業療法士、義肢装具士などで、米国留学を希望する者へ留学の道を開いてくださったことである。米国のリハビリテーション医学界に友人・知人が多い先生ならではのことである。現在、わが国のリハビリテーション医療を第一線で支え、あるいは教育に携わっている人々の中に先生のお力で米国での研修を経験できた者は数多い。現在のリハビリテーション医学の隆盛をみると、わが国のリハビリテーション医学の揺籃期に荻島先生が存在されたことは幸運であったと考えている。

先生が果たして下さったことに感謝し、先生のご冥福をお祈りいたします。